

〈書評〉

大森一三著

『文化の進歩と道徳性——カント哲学の「隠されたアンチノミー」』

(法政大学出版局、2019年)

松本 大理

理性のアンチノミーはカントの『純粹理性批判』の根幹をなす論点であり、『実践理性批判』や『判断力批判』においてもその重要な位置づけは引き継がれている。その一方でカントにはアンチノミー概念の広い用法もあり、認識能力に関する抗争にかぎらず、実践的な領域におけるさまざまな矛盾・対立も含めて語られている。本書はそうしたアンチノミー概念の広がりに着目しつつ、『純粹理性批判』のアンチノミーを偏重することなく、教育・法・宗教の文化領域において見出されるアンチノミー状態に関心を促す試みである。著者の言葉で言えば、「隠されたアンチノミー」を明らかにし、定式化する試みである。

最初に本書の概要を確認しておく。数字は該当ページ数を示している。

「序論」で全体の目的・課題・考察方法が述べられたのち、第1章「批判哲学におけるアンチノミー概念の再検討」では、三批判書におけるアンチノミーの定式化とその変化が論じられる。それによれば、『純粹理性批判』において提示されたアンチノミーは、『実践理性批判』にも受け継がれるが、そこではすでに変化が見られる。ただしその変化は限定的であり、感性界と叡智界の二元論的な区別によって解決されるという基本構想は堅持されている(28)。これに対して『判断力批判』のアンチノミーは、内容や適用領域だけではなく、その解決も変化しており、二元論的区別を持ち出すことなく、概念や格率の相違によって解決が与えられている(29)。こうした『実践理性批判』と『判断力批判』のアンチノミーの変化は、それらが次第に「隠されたアンチノミー」の形式をとり始めたことを示しており(25)、『判断力批判』においてその変化が決定的となったと言える(27)。

第2章「文化と道徳とのアンチノミー」では、その「隠されたアンチノミー」の基本モデルが定式化される。手引きとされるのは「文化」に関するカントの二つの見方や『判断力批判』第82節から第84節の最終目的と究極目的をめぐる論理が持つ異質性である。一方で、「文化は、道徳的に生きるために不可欠」であり、「文化を通じて、人間が道徳的主体となるための準備が行われる」ため、積極的な意義を持つ。他方で、「文化は、道徳と相容れないものであり、道徳的に生きることを阻害する」。したがって「文化を通じて、『輝かしき悲惨』が生じ、道徳的な生そのものの条件が破壊される」という、否定的な側面を伴う(58)。こうした対立し合う二つの主張が、著者の言うところの「隠されたアンチノミー」の定立と反定立である。二つの主張の対立は、道徳への関わり方の違いでもあり、定立の側は、文化を道徳に連続したものとして捉え、「道徳目的論的規定」の立場に立つのに対して、反定立の側は、文化を道徳と異質なものと見なし、「比較する自己愛」に基づいた「人間学的規定」の立場に立っている(57)。後者においては、文化は道徳の側から批判されることになる。その意味で、このアンチノミーは「文化と道徳とのアンチノミー」(58)と名づけられるとともに、次章以下で定式化される各種の「隠されたアンチノミー」の「基本モデル」(39)として位置づけられる。

第3章以降は、「文化と道徳とのアンチノミー」を、教育、法(立法)、宗教の場面において具体的に示す試みである。第3章の「教育」の領域では、「自由と強制とのアンチノミー」が指摘される。それは、道徳教育のために「強制」が不可欠であるとする主張(定立)と、自由な行為を妨げる強制はあってはならないという主張(反定立)との矛盾・対立である(70)。このアンチノミーの解決は、道徳教育が「自分で考えること」、すなわち「自発的な従順さ」を柱とする「理性の開化」という性質を帯びることによって可能になるとされる(88, 93)。なお、この章では個人の教育だけではなく人類の教育についても言及されており、ハーマンのカント批判の検討と人類の教育に関する隠されたアンチノミーの定式化も試みられている。

第4章の「法」の場面では、「自立と平等とのアンチノミー」が取り上げられ、市民状態を構成する「自立」の概念をめぐる矛盾・対立が指摘される。一方で市民の「自立」は、市民状態の構成原理や法制度の発展のために不可欠であり、平等の促進に役立つが(定立)、他方で「自立」という条件は、自立していない者に対する不平等を固定化する危険を含んでいる(反定立)(128-129)。このアンチノミーの解決については、経済的な「自立」にかかわらず、すべての人が持つ「言論の自由」を、法制度の発展を促す根本原理としての的確に位置づけることによって可能であると指摘される(141-146)。

第5章の「宗教」の場面における「隠されたアンチノミー」は、「宗教共同体と倫理的共同体とのアンチノミー」である。歴史上の宗教共同体は倫理的共同体の実現を準備するための乗物として必要であるが(定立)、他方でそれは、「原像」である倫理的共同体との取り違えを引き起こし、位置関係の転倒と道徳性の破壊をもたらすため、不要である(反定立)(163)。このアンチノミーの解決の可能性は、宗教共同体を純粹宗教信仰へ接近させるという、永続的な「闘い」のうちに、見出すことができる(178)。

「結論」では各章の簡潔なまとめが示されている。

さて、以上の概要からもわかるように、本書全体は非常に見通しよく構成されており、批判期後のカントの諸考察に対して「隠されたアンチノミー」という一本の線を引くことで、共通した地盤を視覚化する試みとなっている。教育、法、宗教についての研究は、多くの場合、それぞれの領域に即して考察されがちであるが、共通項を指摘することで、その時期のカントの問題関心と課題の要所を見極めることに貢献していると言える。論の運びにおいては、豊富な文献整理と批判的検討を踏まえた展開がなされており、各問題点に関する基本的な研究史への手引きと解釈上の新しい知見を多くもたらしてくれる。また、共通項として選ばれたものがアンチノミー概念であることは、この概念を『純粹理性批判』の定式化のバイアスから解き放ち、再解釈を促すという意義も持っている。このことは、批判期の体系的な枠組みを相対化する観点を与えるとともに、三批判書執筆後のカントの考察に、別の体系的意図を見出す試みとも読み取れる。すなわち、認識能力の批判という文脈とは異なった、人間の歴史や文化のレベルにおける現実的な諸抗争を統一的に捉える試みである。

こうした趣旨は、本書がキーワードとして設定した「隠されたアンチノミー」という言葉遣いに端的に表現されている。著者によれば、このアンチノミーは「隠れたアンチノミー(Hidden Antinomy)」(10)でもなければ「これまで指摘されてこなかった」(3)アンチノミーでもない。『純粹理性批判』におけるアンチノミーを原型とした、超越論的観念論の立場に基づくことで指摘されるようなアンチノミーの変種ではなく、むしろ、「カント哲学の体系構成上、さらに従来の研

究の解釈傾向によって『隠蔽されてきた』アンチノミー」(3)である。したがってそれを定式化する試みは、批判期に目指された体系的連関とは別の、あるいは、それによって隠されてしまった、新たな問題系を紡ぎ出す試みにほかならない。著者の意図と意気込みがこのキーワードのうちに端的に現れていると言えよう。

ただしこの作業には、相応の困難がつきまとう。最後に、特にこの点に関して論評を加えておきたい。「隠されたアンチノミー」の発見と定式化という課題には、そもそも批判期後のカントの著作に「アンチノミー」という言葉遣いが少ないことから、内容の定めにくさが根本的に伴っている。そのため、隠されたアンチノミーの定式化は、十分に原理的な裏づけを与えないと、たんなるアンチノミー状態の事例の列挙にとどまる可能性がある。各文化領域について強制、自立、宗教共同体に着目してアンチノミー状態が定式化されていたが、他の概念からの定式化や、より根本的なアンチノミー状態の指摘の可能性を残しているように思われる。原理的な考察については、本書第2章において「文化と道徳とのアンチノミー」という基本モデルの指摘とともに、確かに一定程度果たされており、また完璧性を目指したものではないことが断られているが(56)、アンチノミーの生じる原因をさらに論究することが必要であっただろう。場合によっては、本書の「文化の進歩と道徳性」というタイトルに示されている、人類の「進歩」と人間の道徳性や「尊厳」という対立に、より根本的な特徴を求めることも可能かもしれない。同種の指摘は、アンチノミーの「解決の可能性」についてもなし得る。「理性の開化」(教育)、「言論の自由」(法)、「永続的な闘い」(宗教)という解決の可能性を統一的に把握する試みは、「結論」部において「公開的原理」(188)を共通点として指摘するにとどまっている。より踏み込んだ分析を施すことによって、「隠されたアンチノミー」の統一的な意義も高まると思われる。

もちろん、こうした要求は、すでに本書の意図や範囲を大幅に超えているだろう。しかもアンチノミー概念に体系的な意義を求めすぎるとは、著者がまさに退けようとした、批判期のモデルを偏重する態度への後退であるかもしれない。カントのアンチノミー概念の広がり指摘し、それをめぐる考察の土台を提供した点で、本書は研究上の重要な役割をすでに果たしたと言えるだろう。